

MANTIE DIAOCHA BAOGAO

遼寧省檔案館 編

滿鐵調查報告

第三輯

20

滿鐵調查報告

MANTIE DIAOCHA BAOGAO

第三輯

20

遼寧省檔案館 編

廣西師範大學出版社

GUANGXI NORMAL UNIVERSITY PRESS

· 桂林 ·



PDG

大連港背後地研究 調查報告書第十九卷

滿鐵庶務部調查課 一九二三年七月 1

關東州的船務管理

滿鐵庶務部調查課 一九二四年十月 399

旅順作爲漁港所存在的問題

滿鐵庶務部調查課 一九二五年六月 473



調査報告 第十九卷

大連港背後地の研究

南滿洲鐵道株式會社

庶務部調査課



凡 例

本書は昨大正十一年三月本社内に組織せられたる港灣委員會の申し合せにより大連港將來の發展に資する爲め、其の基礎的材料を提供する目的を以て起草したものである。

本書は専ら大連港背後地範圍の研究に終始してゐる、従つて背後地研究の序論とも云ふべきものであるが、背後地の範圍に就て明確なる知識を得れば大連港が滿蒙に於て占むる地位は比較的明瞭に提示さるる譯にして、單に輕き序論の意味を有するに止るとは考へない。唯港灣調査は多岐に涉つてゐるから他日それらの完成を俟つて首尾一貫するであらう。背後地内の生産消費等一般經濟事情についても研究すべき事は少くない、その各論的調査に至つては、これ又企業調査その他港灣調査附隨の調査の結了によりて明にされ得ると信ずる。

本書は簡明を旨とする爲め、直接必要ある點のみを簡單に記述しそれらに關聯する各種の點は既存調査書に譲る事を前提とした、尙此の種の研究の好參考たるべき資料を附録として卷尾に記載しておいた。

本書に於ける噸は米噸にして、一布立は〇・〇一八噸として換算した。

本書は野中時雄、菊田直次、宮本通治の共編にして附圖附表は課員越山宣勝氏を煩した、尙課員高橋正男、阿部勇兩氏の努力に負ふ所も少くない。

大正十二年六月九日

大連港背後地の研究

目次

第一章 緒論

第一節 大連港の現勢

第一項	沿革	一
第二項	位置	二
第三項	氣象	二
第四項	人口	四
第五項	管理及び經營	五
第六項	埠頭諸設備	六
第七項	荷役作業	一〇
第八項	苦力	一〇
第九項	混合保管制度	一一
第十項	埠頭諸手数料	一四
第十一項	大連港の貿易上に於ける地位	一五

目 次

二

第十二項	支那五大港貿易額比較	一六
第十三項	最近數年間に於ける出入船舶の隻數並に噸數	二〇
第二節	大連港背後地研究の意義	二一
第三節	本研究の範圍	二四
第二章	地勢上より見たる背後地の範圍	二七
第一節	背後地範圍決定の自然的因子	二七
第一項	山系	二七
第二項	水系	二八
第三項	道路系	二九
第二節	鐵道系が大連港背後地の自然地理的範圍に及ぶ影響	三〇
第三節	背後地圈の限界	三四
第三章	鐵道輸送數量上より見たる背後地	三六
第一節	滿蒙輸送系統概觀	三六
第一項	交通系統略説	三七
第二項	陸運	三八

第一目	滿蒙の既成鐵道	三八
第二目	滿蒙の豫定鐵道	四六
第三目	馬車輸送	四九
第三項	水運	五八
第一目	遼河	五八
第二目	松花江	六三
第三目	海港	七二
第四項	滿鐵驛勢圈	七六
第一目	安奉線	七六
第二目	本線附撫順驛	八九
第三目	結語	一四五

第二節 過去に於ける輸送數量

第一項	發送客貨數量と其分布	一四七
第一目	營口、安東に比し大連の位置	一四七
第二目	烏蘇里鐵道並に後貝加爾鐵道よりの滿洲移入貨物と大連の發送貨物比較	一四九
第三目	大連發送貨物の分布	一五一
第四目	北滿向大連發送貨物	一五四

目次

三

目 次

四

第五目	大連驛乘車旅客數より見たる背後地	一五五
第二項	到著客貨數量及其の分布	一五八
第一目	到著貨物より見たる營口、安東、大連の位置	一五八
第二目	大連到著貨物の發送先分布	一六〇
第三目	大連到著貨物の種類別數量	一六二
第四目	大豆、豆粕及豆油の發送先分布	一六四
第五目	北滿貨物の大連到著數量	一六七
第六目	北滿貨物の大連及浦鹽到著割合	一六九
(イ)	北滿貨物の移動狀態	一六九
(ロ)	北滿穀物の輸出方向別數量	一七五
(ハ)	北滿穀物の事局の影響に依る輸出方向別數量の變動	一八三
第七目	東支南下貨物(聯絡)の發送先より見たる數量	一八五
第八目	大連降車客數より見たる背後地	一八九
第三項	大連發著貨物増加の將來	一九一
第一目	大連發送貨物	一九一
第二目	大連到著貨物	一九四

第四章	北滿貨物と大連港	一九八
-----	----------	-----

第一節 北滿貨物の輸出港……………一九八

第一項 北滿の特産物……………一九八

第二項 大連浦鹽との比較……………二〇五

第二節 過去に於ける北滿貨物の輸出経路……………二一一

第三節 北滿貨物を中心とする東支南滿兩鐵道……………二三一

第一項 兩鐵道の地位……………二三一

第二項 東支鐵道が採れる政策……………二二七

第三項 南滿鐵道の對策……………二四一

第五章 結論……………二七六

第一節 大連港背後地の現勢……………二七六

第二節 大連港背後地に對する諸政策……………二七九

第一項 原始生産業の改良發達……………二八〇

第一目 農業……………二八〇

第二目 畜産業……………二八四

目次

五

目次

第三目 鑛業	二八五
--------	-----

第二項 工業	二八六
--------	-----

第三項 運輸機關の完備	二八七
-------------	-----

第四項 金融機關の完備	二九一
-------------	-----

第五項 北滿貨物の南下策	二九二
--------------	-----

第六項 消費力増進策	二九三
------------	-----

第三節 大連港の將來	二九六
------------	-----

附錄

資料

一、滿蒙優良種苗普及事業計畫案	一
-----------------	---

二、農藝師範學校設立計畫概要	一六
----------------	----

三、東支鐵道戰前タリフ	一九
-------------	----

四、大連到著累年特產物數量	三九
---------------	----

目次終

大連港背後地の研究

庶務部調査課員

野中時雄
菊田直次
宮本通治

第一章 緒論

第一節 大連港の現勢

第一項 沿革

大連は露國のダルニー市建設前に於ては、漁農を業とする總數四五十軒の二、三村落に過ぎなかつた。清末李鴻章が遼東の地の經營を志し、金州半島の要港となして以來、大連灣の名は漸く世に知らるゝに至つたのである。

日清戦争の結果、日本は遼陽半島の割譲を受けることになつたが、三國干涉に遇ふて之を支那に還附した。

然るに一八九八年、我を強要したる露國自ら南下の野心を遂げんが爲に支那の國勢舉らざるに乘

第二章 緒論

じ遼東半島の一部たる關東州の租借權並びに東清南滿洲鐵道の敷設權を獲得した。而して規模頗る雄大なる計劃を樹て旅順、大連の經營に其熱狂的努力を惜まなかつた。一九〇三年既に入港船舶七九二隻輸出入數量合計約二千八萬噸、價格三千五百萬圓を算へることが出來た。

然し今日五百萬噸、六億圓の貿易額に比すれば殆ど言ふに足りない。實に支那第二の貿易港たるの榮を擔ふに至つたのは、日露の役後、露國政府の後を繼承して日夜奮闘した南滿洲鐵道株式會社十有餘年の刻苦の賜である。

第二項 位置

大連港は滿洲の南部、遼東半島の西南端に位し東南に開口せる大連灣の西南部を占め、東經百二十一度三十九分北緯三十八度五十六分に當つてゐる。

各港よりの距離

小樽	一三〇〇 ^哩	新 潟	九六〇 ^哩
神 戸	八六〇	横 濱	一二〇〇
長 崎	五七〇	上 海	五五〇
香 港	一二七〇	シンガポール	二六三〇
ボンベイ	五、一〇〇	マルセイユ	九、二〇〇
ロンドン	一〇、九〇〇	シアトル	五、一八〇
サンフランシスコ	五、五〇〇		

第三項 氣象

降水量少く概して風が強い。年平均温度は我秋田、山形、長野、石巻等に等しけれど、寒暑の差は之等地方よりは著しく、夏季は大分、京都、東京と冬季は根室、函館、札幌と似てゐる。

白川治三十八年最高最低氣温表 ×は零下
至大正九年

區別	月次	一月	二月	三月	四月	五月	六月	七月	八月	九月	十月	十一月	十二月
最高温度		九・六	一二・七	一七・七	二五・七	三〇・九	三五・〇	三四・〇	三三・七	三一・〇	二七・四	二二・〇	一三・〇
最低温度		一九・三 ×	一九・三 ×	一二・四 ×	一・三	一・三	一・三	一・六	一五・〇	六・八 ×	一・九 ×	九・三 ×	一七・六 ×
自三十八年 至大正九年 平均		四・九 ×	三・四	一・八	九・一	一五・一	二〇・三	二二・六	二四・七	一九・九	一三・九	五・一 ×	二・〇

一	二	三	四	五	六	七	八	九
月	月	月	月	月	月	月	月	月
至大正五年 至大正九年 平均氣壓	七七・〇・九	七六・九・九	七六・七・二	七六・二・〇	七五・七・六	七五・四・四	七五・四・二	七五・五・九
至大正五年 至大正九年 平均風力	七・二	六・九	七・三	七・四	六・八	六・〇	五・九	五・五
至大正五年 至大正九年 平均降雨量	九・五	一〇・九	一八・九	一八・七	五〇・九	五七・一	二〇・五・八	一三・一・七
至大正五年 至大正九年 平均温度	六・四・〇	六・三・四	五・九・八	五・四・四	六・〇・二	七・〇・〇	八・一・六	七・七・〇
								七・〇・六

第一章 緒論

四

六三・〇
六三・五
六〇・二

四

六三〇
六三五
六〇二

12

12

12

總		一		大		水	
						連	
計		圖		港		面	
計	女	計	女	計	女	計	女
六八、二八七	三〇、七四二	三二、五四五	六二四	一三三	六〇一	四三	一、八七四
三九三	一八六	二〇七	四三	一	四三	七八	二、五九九
一九八、五三四	四七、八五八	一五〇、六七六	一、八七四	一	一、八七四	二五	二、六三三
二八六	七四	二二	八〇	二	七八	二八六	二、六三三
二六七、五一六	七八、八六三	一八八、六五三	二六三	二五	二、五九九	二六七、五一六	二、五九九

第五項 管理及び經營

大連港の管理及び經營は關東廳並びに南滿洲鐵道株式會社が之を分掌してゐる。

關東廳は一九〇八年大連に海務局を設け港務、海港、檢疫、船舶の測度、検査其他海事に關する諸般の行政事務を掌理せしめた。

而して港灣の増築及び實際の運用は南滿洲鐵道株式會社が之に當つてゐる。

會社の資本金現在四億四千萬圓にして其半は帝國政府の出資に係る。一九〇六年外務、大藏、逓信三大臣の會社設立命令に基いて設立せられ大連、長春間の鐵道並びに支線の運輸業、撫順及び煙臺の炭坑採掘、鞍山の製鐵業、水運業、電氣業等を營んでゐる。

因に最近六箇年間に於ける滿鐵の收支並びに港灣の收支を擧ぐれば左の如くである。

滿鐵の收支

年	度	收入	支出	純益
大正	五年	五二、四〇二、四〇八 _円	四二、二九四、八〇一 _円	一〇、一〇七、六〇七 _円
同	六年	六九、四二九、二五二	五四、五〇三、六〇九	一四、九二五、六四三

第一章 緒論

五

第一章 緒論

同 七 年	九六、二五七、八七八	七四、〇六四、七〇六	二二、一九三、一七二
同 八 年	一五三、一三三、三八七	一二八、七五八、四二三	二四、三七四、九六四
同 九 年	一七四、七三八、二八七	一四七、三四六、三〇三	二七、三九一、九八四
同 十 年	一四七、一〇〇、六九三	一一五、七一四、四六四	三二、三八六、二二九

港灣の收支△印は缺損

年 度	收 入	支 出	純 益
大 正 五 年	二、五〇一、一二一 _四	二、一三七、八八〇 _四	三六四、二四一 _四
同 六 年	三、四九九、九三四	三、一〇六、八六二	三九三、〇七二
同 七 年	四、五三二、九一四	四、四九四、一七〇	三八、七四四
同 八 年	六、〇六九、八八四	七、四〇四、九三二	△ 一、三三五、〇四八
同 九 年	七、三〇三、九二二	七、八六七、一八〇	△ 五、六三二、六六八
同 十 年	七、五八〇、五六〇	六、九一一、九〇四	六六八、六五六

第六項 埠頭諸設備

南滿洲鐵道株式會社が設立せられた當時の大連港は現第二埠頭及び甲埠頭の落成せるのみであつて、第一埠頭南半部の岸壁竣成せるも北部は半成に止まり防波堤も亦西北防波堤の東半部の稍々見るべきものがあつたが西半部は全く著手するに至らず東防波堤の如きは僅に捨石工事に著手せしのみであつた。今や一千噸級船舶一〇隻、四千噸級乃至六千噸級船舶六隻、八千噸乃至一萬噸級船舶一〇隻、二萬五千級一隻合計二十七隻總噸數十七萬噸を同時に繋留し得べき設備を有し而かも尙擴